西南学院大学　人間科学論集　第15巻　第1号　　1―33頁　2019年8月

# 絵本『いぐいぐいぐいぐ』小考

## ―“子供参加型の群読”を構想するために―

古　田　雅　憲

Preliminary Study for Group Reading Aloud
on “Igu-igu-igu-igu”

Masanori Furuta

**【はじめに】**

論者の担当する［国語教育ゼミ］で群読の台本作りと実践を行うようになってそれなりの時間が経った。いつか学校園に勤めて乳幼児・児童の言葉を育む役割を担う（であろう）学生たちは，「読み分かち／読み担い」などといった群読づくりの基本(＊1)を学ぶなかで素材・教材研究のための知見を培い，また声と身体を操る技能を体得している様子である。また年に一度の卒業公演とそれに至る日々の練習のなかで“言葉の芸術性”にも目覚めるところがあるらしい――「乳幼児・児童の言葉を育むための知見と技能について，それなりの修学が担保されている」と自評してもお許しいただけようか。

それにしても悩ましい課題がある――知見を深め技能を高め，それなりに多様で豊かで工夫を凝らした群読ができるようになるにつけても，学生たちの実践は“聞き手から遠く離れていく”ように見えるのだ。聞き手は彼等の公演をただ見守るばかりの“お客様”になっていく――まさしく「ご静聴いただきまして」との挨拶が似つかわしくて。

このようなところから学生たちの新たな願いが芽生えた――「聞き手のみなさんと，それが子供たちであればなおのこと，もっと一緒に“声と言葉の世界”を楽しみたい，群読によって紡ぎ出される物語世界を共有したい」といったように。むろんそれも必定――彼等は保育士や幼小教員の“卵”なのだから。

そのような願いを踏まえて，たとえば「ビジュアルシンキングを併用する群読の構想」を模索したこともある(＊2)。それはそれで面白いアイディアだが，聞き手の子供たちともっとダイレクトに，互いの“声”を重ね合わせながら交流するすべはないものか――そう模索しつづけるうちに偶然，絵本『いぐいぐいぐいぐ』を群読の素材として取り上げる機会を得た。小稿に言う「子供参加型の群読」の思いつきはそういう経緯の末に具体化した。

## 【絵本『いぐいぐいぐいぐ』について】

絵本『いぐいぐいぐいぐ』は絵・文章とも梶山俊夫さん(＊3)の作。1977年，フレーベル館から刊行された。

その創作の経緯について梶山さんご自身が，ある対談記事のなかで次のように語っていらっしゃる(＊4)。

> ――『いぐいぐいぐいぐ』は，副題に「わが西山風土記より」とありますが，子ども時代の常陸太田での思い出が下じきになっているんでしょうか。
>
> そうですね。西山というのは僕の遊び場だったんです。それと岩手のきりなしばなしを抱き合わせてね。子どもを寝かしつける時に，いぐいぐいぐ…とおす蛙たちが鳴くと，めす蛙たちがごじゃらばごじゃれ，ごじゃらばごじゃれ，それを延々とくり返していく，ただそれだけの話なんです。そうすると子どもたちは聞き飽きて，寝ちゃう。蛙ってのは，僕はさっき蛙釣りのあれでね，こいつらをどうしても絵本にしてみたかったんですね。

「ただそれだけの話」とはご謙遜――もちろん「いぐいぐいぐいぐごじゃらばごじゃれ，しゅるしゅるしゅるしゅるう」とくり返される“声”や“音”を語りの基調に据える点などはまさしく“きりなし噺”のしつらえそのものなのだが，それらの“声”や“音”ときたら「風土記」と自称するような“旧書”とも“古伝承”ともつかない，言わば“共同体の記憶の彼方”から高く低く響いてくるらしいのだ――それはまさしく“呪文”みたく，それを通じていにしえの夢幻をうつつに蘇らせる“呪術”のようでさえある。

いわゆる“きりなし噺”がオノマトペ等の音や響きの面白さを活かした“言葉遊び”あるいは話の内容じたいは重視しない“形式譚”だとするならば，この絵本はただの“遊び”でも“形式”でもない。それは言わば“声や音を通してわれわれの記憶をたどる”試みである。この一点においてさえ『いぐいぐいぐいぐ』は実に奇抜な独創と言って良い。

◇　　◇

あの長谷川摂子さんもまたこの作品の魅力について次のように記していらっしゃる(＊5)。

『いぐいぐいぐいぐ』（梶山俊夫作・絵／フレーベル館）という絵本もふしぎな魅力を持っている。

暗いセピア色の地の上に，ぺらんと一枚紙をおいたような画面，そこに底光りして浮き上がる日本画の緑青の山々がうねり，向こうから，全身朱色の三つ目怪物が「べったら　べったら」やってくる。出会った娘が，油一升さし出し，「くわれてもいいんけんど　これ　のませっから　そのくび　もっと　のばしてみせてくれや」というと，三つ目は，「いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらば　ごじゃれ」と唱えよ，という。さあ娘は唱えた，唱えた。すると田んぼのかえるもいっしょに唱えだしたからたまらない。まっかな首は大蛇さながら宙を浮いて幾重にもくねり，しゅるしゅるしゅるとのびていく。娘の婆さまがこれを見つけ，「こんな　なげえ　ばけものふんどし　みたことね」と，鎌でチョッキリ切ってしまう。ちょんぎられて山の向こうに寂しく飛んでいった三つ目は，みみずになったそうな，というあっけらかんとしたばけもの話だ。

その評価についてもまた(＊6)。

「いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらば　ごじゃれ」という低い呪文の声とあいまって，この作品にはおぼろにかすむ夢のような，昔話特有のほのかな光がみちている。その光の中で，娘も婆さまも三つ目も，みんなひとつに融け合っている。首がのびる三つ目のおもしろさもさることながら，このばけものが，なんの違和感もなしに堂々とのし歩いているこの絵本の世界

そのものがばけものじみている。けれどその世界はグロテスクではなく，どこかしらなつかしい。梶山俊夫の描く，やわらかで稚気にみちた山や田，闇に浮かぶ底光りする緑と朱の色彩は，わたしたちを民族の深層心理とでもいうべきはるかな夢幻の領域にひきこんでいくようだ。

この作品の本質を見事に言い当てた言葉たちはまさに“絵本読みの達人による至言”と言うべきか――この絵本は「おぼろにかすむ夢のような，昔話特有のほのかな光がみちている」舞台の上で登場人物たちが「みんなひとつに融け合って」，人が化け物とさえ「なんの違和感もなしに」交流しているような「どこかしらなつかしい」「夢幻の領域」に読者をいざなう作品なのだ。そして読者をその夢幻世界へ導く“仕掛け”こそ，何度もくり返される「いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらば　ごじゃれという低い呪文の声」である――論者などがこの絵本の世界を“声”や“音”の重なりのなかで表現してみたい，そう思い立つことも実は自然のことなのだろう。

「いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらばごじゃれ」とは，無数のおすがえる・めすがえるたちの鳴き交わす“声”である――それが大勢による単純な繰り返しであればこそ，子供たちもその場で容易に参加できるのだ。それが小稿に言う「子供参加型の群読」を構想しようとする思いつきの端緒である。ともあれ台本の全体をまずは掲げてみよう。

## 【絵本『いぐいぐいぐいぐ』による群読台本（案）】

■群読台本；全５人用（読み手ａ～ｅ）
■主な読み担い；a)“ばあさま”と“おすがえる”，b/c/d)“三つ目”，
　　e)“むすめ”と“めすがえる”
■子供参加；会場上手側に座る子供たちが“おすがえる”，
　　また下手側の子供たちが“めすがえる”として参加する。

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 表紙 | 01 | a | ＜表紙を提示する＞<br>（**これは　*西山　*というところに　伝わるお話です。） |
| 扉 | 02 | a | ＜扉絵を提示する＞<br>**梶山　俊夫　*作　*絵 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | abc | ＊いぐいぐ |
| | | cde | ＊いぐいぐ |
| | | e | ＊わが 西山風土記より |
| 1−2 | | | ＜絵①：1−2 頁を提示する＞ |
| | 03 | ab | ＊＊にしやまに ＊しょんぼり ＊ひが おちた。 |
| | 04 | bc | ＊＊あたりは ＊しょんぼり ＊くれてきた。 |
| | 05 | cd | ＊＊ふああ ＊と なまあったかい かぜ ふけば |
| | | de | ＊そろそろ ＊三つ目が でてくる ころや。 |
| 3−4 | | | ＜絵②：3−4 頁を提示する＞ |
| | 06 | de | ＊＊ふああ ＊となまあったかい かぜ ふいてきた。 |
| | 07 | a−e | ＜間髪いれず＞それ みなせ |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞にしやまの ふもとから ＊三つ目が やってきた。 |
| | 08 | b | ＊＊あしを ＊べったら |
| | | c | ＊べったら |
| | | d | （＊べったら）＊させて |
| | | b | ＊＊三つめだま ＊ぎんぎら ┐ ＜それぞれ思い思いに会場を |
| | | c | （＊ぎんぎら） ┤ にらみ回しながら＞ |
| | | d | （＊ぎんぎら）＊させて ┘ |
| | | bcd | ＊やってきた。 |
| | 09 | c | ＊＊きょうは にんげんを くってやっか。 |
| | 10 | bcd | ＊＊三つめだま ぎんぎらさせて |
| | | a−e | ＊でん ＊と ふんばったとよ。 |
| 5−6 | | | ＜絵③：5−6 頁を提示する＞ |
| | 11 | a | ＊＊むこうから ＊あぶら 一しょう ぶらさげて |
| | | e | ＊ぺたら ┐ ＜高い声＞ |
| | | a | （＊ぺたら） ┘ ＜低い声＞ |
| | | e | ＊ぺたら ┐ ＜高い声＞ |
| | | a | （＊ぺたら） ┘ ＜低い声＞ |
| | | ae | ＊＊むすめが ひとり やってきた。＜三つ目に気付かない様子＞ |
| | 12 | c | ＊＊＜特に大きな声で＞はら へった |
| | | b | ＊はら へった。 |
| | | d | ＊こおら ＊おまえを くってやる。 |
| | 13 | bcd | ＊＊三つ目は くびを ＊しゅるう ＊と つんだしたとよ。 |
| | | | ＜ e はここで初めて三つ目に気付いたというような所作をする＞ |
| 7−8 | | | ＜絵④：7−8 頁を提示する＞ |
| | 14 | ae | ＊＊むすめは びっくりするやら あわてるやら。 |
| | 15 | e | ＊＊こくん ＊と 一つ ＊つば のんで ＊＊かのなくような こえで |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | いったとよ。 |
| | 16 | e | **＜間を長めに＞くわれてもいいんけんど *これ のませっから |
| | | | **＜間を長めに＞そのくび *もっと のばしてみせてくれや。 |
| | 17 | c | **＜自信たっぷりな様子で＞そんなら みせてやっか。 |
| | 18 | b | *＜早口で＞いぐいぐいぐいぐ ごじゃらば ごじゃれ って |
| | | d | *はやくちで となえてみろ |
| | 19 | bcd | **このくびは なんぼでも のびていくわい。 |
| 9－10 | | | ＜絵⑤：9－10 頁を提示する＞ |
| | 20 | abc | **＜一息に＞あぶらか さけか |
| | | cde | ＜間髪いれず一息に＞さけか あぶらか |
| | | a－e | **三つ目は はら へって *とんと わからん。 |
| | 21 | bcd | ＜間髪いれず一息に＞つるつるつる（っ）と のみほしたとよ。 |
| | 22 | ae | **そこで むすめは となえたとよ。 |
| | 23 | e | **＜ためらいがちに＞いぐいぐいぐいぐ *ごじゃらば ごじゃれ |
| | 24 | bcd | *すると 三つ目の くびが *＜区切りつつ＞しゅる・しゅる。 |
| | 25 | e | **そこで むすめは |
| | | | ＜間髪いれず一息に＞いぐいぐいぐいぐ ごじゃらば ごじゃれ |
| | 26 | bcd | ＜間髪いれず＞すると 三つ目の くびが |
| | | | *＜区切りつつ＞しゅる・しゅる・しゅる。 |
| 11 | | | ＜絵⑥：11－12 頁を提示する＞ |
| －12 | 27 | ae | **そこで むすめは |
| | | | ＜間髪いれずリズミカルに＞いぐいぐいぐいぐ ごじゃらば |
| | | | ごじゃれ |
| | 28 | bcd | ＜間髪いれず＞すると 三つ目の くびが ＜一息に＞しゅるしゅる |
| | | | しゅるしゅる。 |
| | 29 | bcd | **三つ目は 三つめだま |
| | | c | *ぎんぎら　＜声を徐々に高くして＞ |
| | | bc | ＜間髪いれず＞（ぎんぎら）　＜それぞれ思い思いに会場を |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞（ぎんぎら）　にらみ回しながら＞ |
| | | a－e | ＜間髪いれず＞（ぎんぎら） |
| | | c | **させたとよ。 |
| | 30 | bcd | ＜間髪いれず＞いつまで となえとるだあ。 |
| 13 | | | ＜絵⑦：13－14 頁を提示する＞ |
| －14 | 31 | a | **それ きいて *むかいの たんぼの おすがえるが |
| | | | なきだしたとよ。 |
| | 32 | a | **いぐいぐいぐいぐ *いぐいぐいぐいぐ。 |
| | 33 | a | ＜会場上手側にいる子供たちに一緒に唱えるよう促す＞ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | （＊さあ こちらがわに いる みんなも おすがえるに なって いっしょに いぐいぐ いってみて。せーの） |
| | 34 | 子供 | （＊＊いぐいぐいぐいぐ ＊いぐいぐいぐいぐ。） |
| | 35 | a | （＊さあ もう一度。もっと大きな声で。さん ハイ。） |
| | 36 | 子供 | （＊＊いぐいぐいぐいぐ ＊いぐいぐいぐいぐ。） |
| | 37 | e | ＊＊それ きいて ＊そのまた むかいの たんぼの めすがえるが なきだしたとよ。 |
| | 38 | e | ＊＊ごじゃらばごじゃれ ＊ごじゃらばごじゃれ。 |
| | 39 | e | ＜下手側にいる子供たちに一緒に唱えるよう促す＞<br>（＊さあ こちらがわの みんなが めすがえるに なって ごじゃらばごじゃれって いってみて。せーの） |
| | 40 | 子供 | （＊＊ごじゃらばごじゃれ ＊ごじゃらばごじゃれ。） |
| | 41 | e | （＊さあ もう一度。もっと大きな声で。さん ハイ。） |
| | 42 | 子供 | （＊＊ごじゃらばごじゃれ ＊ごじゃらばごじゃれ。） |
| 15<br>－16 | | | ＜絵⑧：15－16 頁を提示する＞ |
| | 43 | bcd | ＊＊すると 三つ目の くびが<br>＜それぞれ大仰な身振りで会場をにらみ回しながら＞ |
| | 44 | c | ＜間髪いれず一息に＞しゅるしゅるしゅるしゅるう。 |
| | 45 | bd | ＜間髪いれず一息に＞しゅるしゅるしゅるしゅるう。 |
| | 46 | bcd | ＜間髪いれず一息に＞（しゅるしゅるしゅるしゅるう。） |
| | 47 | c | ＊＊もう ＊＊はあ |
| | | a－e | ＊＊かえるまで となえたから ＊なんぼでも のびていくとよ。 |
| 17<br>－18 | | | ＜絵⑨：17－18 頁を提示する＞ |
| | 48 | a | ＊＊いぐいぐいぐいぐ<br>＜会場の子供全体に一緒に唱えるよう合図する＞ |
| | 49 | a子供 | ＊＊いぐいぐいぐいぐ |
| | 50 | e | ＊＊ごじゃらばごじゃれ<br>＜会場の子供全体に一緒に唱えるよう合図する＞ |
| | 51 | e子供 | ＊＊ごじゃらばごじゃれ。 |
| | 52 | b | ＊＊しゅる |
| | | c | ＜間髪いれず＞しゅる　＜ひと続きに聞こえるようなめらかに＞ |
| | | d | ＜間髪いれず＞しゅる |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞しゅるう |
| | 53 | b | ＜間髪いれず＞しゅる |
| | | c | ＜間髪いれず＞しゅる　＜ひと続きに聞こえるようなめらかに＞ |
| | | d | ＜間髪いれず＞しゅる |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞しゅるう |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | ＜会場の子供全体に一緒に唱えるよう促す＞ |
| | 54 | a | （＊それでは みんな一緒に） |
| | 55 | 全員 | ＊＊いぐいぐいぐいぐ ＊いぐいぐいぐいぐ |
| | 56 | 全員 | ＊＊ごじゃらばごじゃれ ＊ごじゃらばごじゃれ。 |
| | 57 | bcd | ＊＊＜一息に＞しゅるしゅるしゅるしゅるう |
| | | | ＜間髪いれず一息に＞しゅるしゅるしゅるしゅるう |
| 19 | | | ＜絵⑩：19－20 頁を提示する＞ |
| －20 | 58 | c | ＊＊こりゃ おおごとや。 |
| | 59 | bcd | ＊＊三つ目は あわてたのなんのって。 |
| | 60 | b | ＊＊おらあ どこまで いったらいいだあ。 |
| | 61 | bcd | ＊＊三つめだま ぐるぐるさせて どなったとよ。 |
| | | | ＜それぞれ大仰な身振りで会場をにらみ回しながら＞ |
| | | | ＜会場の子供全体に一緒に唱えるよう促す＞ |
| | 62 | a | （＊それでは もう一度，みんな一緒に。） |
| | 63 | 全員 | ＊＊いぐいぐいぐいぐ ＊いぐいぐいぐいぐ |
| | 64 | 全員 | ＊＊ごじゃらばごじゃれ ＊ごじゃらばごじゃれ。 |
| | 65 | bcd | ＊＊＜一息に＞しゅるしゅるしゅるしゅるう |
| | 66 | a－e | ＜間髪いれず一息に＞しゅるしゅるしゅるしゅるう |
| 21 | | | ＜絵⑪：21－22 頁を提示する＞ |
| －22 | | | ＜会場の子供全体に一緒に唱えるよう促す＞ |
| | 67 | a－e | （＊これで 最後だよ。みんな 一緒に。） |
| | 68 | 全員 | ＊＊いぐいぐいぐいぐ ＊いぐいぐいぐいぐ |
| | 69 | 全員 | ＊＊ごじゃらばごじゃれ ＊ごじゃらばごじゃれ。 |
| | 70 | 全員 | ＊＊しゅるしゅるしゅるしゅるう |
| | 71 | 全員 | ＊＊しゅるしゅるしゅるしゅるう |
| | 72 | a－e | （＊もう一回，大きな声で。） |
| | 73 | 全員 | ＊＊いぐいぐいぐいぐ ＊いぐいぐいぐいぐ |
| | 74 | 全員 | ＊＊ごじゃらばごじゃれ ＊ごじゃらばごじゃれ。 |
| | 75 | 全員 | ＊＊しゅるしゅるしゅるしゅるう |
| | 76 | 全員 | ＊＊しゅるしゅるしゅるしゅるう |
| | 77 | a－e | （＊とても元気にできました。拍手。） |
| 23 | | | ＜絵⑫：23－24 頁を提示する＞ |
| －24 | 78 | ae | ＊＊あんまり むすめの かえりが おそいもんで |
| | | | ＊ばあさまが とぐちに でたら |
| | | bcd | ＊あたまの うえを あかい もんが ＊しゅるしゅるしゅるって |
| | | | のびていくとよ。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 25 | | | ＜絵⑬：25－26 頁を提示する＞ |
| －26 | 79 | a | ＊＊こんな なげえ ばけものふんどし みたことね。 |
| | 80 | a | ＊ばあさまは かまを もちだして |
| | | | ＊チョッキリ ＊＊と きったとよ。 |
| 27 | | | ＜絵⑭：27－28 頁を提示する＞ |
| －28 | 81 | c | ＊＊なんじゃ かるくなったみてだな。 |
| | 82 | bcd | ＊うしろ ふりかえって 三つ目は あわてたのなんのって。 |
| | 83 | ae | ＊＊＊かぜが ぽふあ ＊と ふいてきた。 |
| | 84 | bcd | ＊＊三つ目の くびは |
| | | a | ＊あっちへ　＜ひと続きに聞こえるようなめらかに＞ |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞しゅるしゅるう |
| | | e | ＊こっちへ　＜ひと続きに聞こえるようなめらかに＞ |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞しゅるしゅるう |
| | | ae | ＊とんでいくとよ。 |
| | 85 | c | ＊＊いったい どこまで とんでいくんやら |
| | | a－e | ＊その さきは ＊とんと ＊だ（あ）れも しら~~ぬ~~（ん）かったとよ。 |
| 29 | | | ＜絵⑮：29－30 頁を提示する＞ |
| －30 | | | |
| 31 | | | ＜絵⑯：31 頁を提示する＞ |
| | 86 | ab | ＊＊なんでも 三つ目は ＊くびばっかり ぶらさげて |
| | | bc | ＊しゅるしゅる ＊（しゅるしゅる）とんでいるんで |
| | | cd | ＊もうはあ ＊あんけらこんけら |
| | | | ＊めんどくさくて ＊たまんねえって |
| | | de | ＊つちのなかに もぐってしまったとよ。 |
| | 87 | ace | ＊そしたら めも みえなくなってきて |
| | | bd | ＊とうとう みみずになって しまったとよ。 |
| | 88 | ace | ＊ほんとか うそか |
| | | | ＊それは だ（あ）れも しらな（ん）かったとよ。 |
| | 89 | c | ＊そうや ＊みみずに きいてみたら ＊どうやろか。 |
| | 90 | a－e | （＊＊これで おしまい。） |

※原文にない文言等を追補した場合には「マル括弧（ ）」で示した。
※原文の文言等を削除した場合には二重線を掛けて「見せ消ち」とした。
※特に必要と考えた演出については「ヤマ括弧＜＞」で示した。
※＜＊＞は「一拍の間を置く」ほどの意。
※ステージ上にスクリーンを設置（設置場所は任意）。プロジェクターを通じて，群読の進み方に合わせて絵本当該頁を拡大提示する。
※ステージ上手から a，b，c，d，e の順に，緩く弧を描いて並ぶ。
※文番号は練習及び検証等の必要から恣意的に施した。

## 【絵本『いぐいぐいぐいぐ』の“読み解き”について】

次に，この台本（案）を試作する際に踏まえた“絵と言葉を読み解き”について述べるとともに，群読実践に向けての留意点等について触れておきたい。

1）「表紙」「扉」部分の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 表紙 | | | ＜表紙を提示する＞ |
| | 01 | a | （**これは ＊西山 ＊というところに 伝わるお話です。） |
| 扉 | | | ＜扉絵を提示する＞ |
| | 02 | a | **梶山 俊夫 ＊作 ＊絵 |
| | | abc | ＊いぐいぐ |
| | | cde | ＊いぐいぐ |
| | | e | ＊わが 西山風土記より |

まずは［表紙］から見てみよう。

［表紙絵］ぎょろりと目をむく蛙たちが八, 九匹ばかり，稲刈り後の田んぼにつくばっている。みな画面左あるいは左上方を凝視する躰である。彼等の間にはヘビかミミズか, 何やらにょろりとしたモノがのたくっている。裏表紙を見返すとそいつの正体が分かろうというもの――“三つ目の化け物”の長いながい首だった。こちら側にも八匹の蛙が，今度はみな画面右方を向いてつくばっている。

表紙には「いぐいぐいぐいぐ　作／絵・梶山俊夫」とあるばかり。この物語をどういう風に読み始めたものか，なんともとっつきにくい始まりである。

もし「けろけろ」だの「げこげこ」だのとあったなら，それ「蛙の鳴き声」だとすぐ知れるのだろうし，そこから物語の行方もまたうっすらと想像できたりもするのだろうが，のたくる化け物の長い首と多くの蛙たち，そして「いぐいぐ」という音からは，およそ方向感の定まらないとまどいだけが立ちのぼるばかり――もちろん，その“幻惑”こそ作品の魅力の源泉なのだけれども，それは一読してみて初めて分かろうというもの。最終頁の「ほんとかうそか／そ

れはだれも／しらなかったとよ／そうや／みみずに／きいてみたら／どうやろか」とのアッケラカンとしたしまい方がそれだ。

そうは言っても，さてどう読み始めるか――あれこれとまどいながら上に掲げる「台本案」を編んでみた次第。

◇　◇

梶山さんのお名前と題名とは［表紙］ではなく［扉］のところで読むことにした（02 文）。そこには「いぐいぐいぐいぐ」の文字が四匹の蛙の傍らに描き添えられていて，この絵を見ながらであれば（「いぐいぐいぐいぐ」とは蛙の鳴き声だったか）と，いくらかなりとも感じとられるだろうから。

したがって［表紙］では「これは西山というところに伝わるお話です」（01 文）と補って言うだけに留めた――もっとも聞き手にしてみれば「西山」と聞かされたところで（どこのことやら）と，まったく要領を得ないままだろう。が，そうは言っても「西山というところは，北関東は茨城県の常陸太田という小さな町の，そのまた外れにある小さな山のこと。そこは作者の梶山さんが子供のころに疎開していた場所なのです。戦争中，都会には爆弾がたくさん落ちてくると言われて，そちらの子供たちは遠くの親戚を頼って地方の小さな町に逃れて行って暮らしたのです…」などといったん説明を始めてしまえば，どこまでもくだくだと話し続けなければ終わらない――いつまでたっても物語が始まらない。それならいっそ「西山というところ」と“どことも知れない場所”のままにしておく方がずっと良い。

◇　◇

ちなみに「西山」については梶山さん自身のエッセイに詳細な言及がある。

最初に掲げるのは，その場所を「三十年ぶりにたずねてみ」た，とうに大人になった梶山さんの見た景色である(＊7)。（必要に応じて私に略して引用した。以下同様）

> わが西山は，この小さな町にそって流れる西川（源氏川）をはさんで，南北にだらだらとつづく標高七十メートルにもみたないおとなしく優しい山である。

阿武隈山脈が，北からよいしょよいしょと山をごろごろ転がし南下して。さてもういよいよこれで積み上げ仕舞いというあたり，一握りの土くれをのこしたところが，子どもの頃すごした町，どこからも坂道となって鯨ヶ岡とうたわれている常陸太田という町である。

町に平行して向いにわが西山が，どんぐりの背くらべに対座しているといった塩梅だ。そして灌木の林の上を，赤松がひょいひょい顔を出して，暢気に風に吹かれて何かにつけて町を眺めているといった風景だ。そこから後ろはうねうねと山が重なり深く続いているといった，日本中どこにもある，目の前のあそこの山ここの山といったような，人の暮らしを近間にひかえた山である。

穏やかな風景のなかで時を忘れて楽しく遊び回っていたとしても，ある瞬間まったく不意に，あちらこちらの物陰や薄暗がりの内に“異界”がぽっかりと口を開け“そちら側の住人たち”がこちらをジッと見つめている――子供たちは確かにそれを知っていた(＊8)。（必要に応じて私に略して引用した。）

西山が暮れてせまった。…＜中略＞…

「人さらい来っとォ」

誰かが叫んだ。みんなばしゃばしゃ土手に上がった。走った。

西山の上を赤松が背伸びして並んでいた。…＜中略＞…そのてっぺんあたりだけ，夕日をうけて光っている。

昼間走った西山の雑木林の下あたりは，黒々としーんとして，闇のような影が，固まり合っている。

＜あそこに，何かがじっとひそんでいそうだ。やっぱりあそこなんだ。あそこにはわけのわからない影の固まりになって，何かがひそんでいるんだ＞

ぼくは目をこらした。闇の中で，何かがじっと息をころしているんだろうか，キヲツケの姿勢をして見つめた。…＜中略＞…からだの下の方から，川のにおいがぼんやり広がってきた。すっかり身体が冷たくなった。

…＜中略＞…

誰かが叫んだ。

「もう西山さ行っちゃなんねえぞ，人さらいが来っかもしんね」…＜中略＞…

＜人さらいは，籠をしょっているんだ。リヤカーを引っぱってくることもあるんだ。リヤカーに乗せられてしまったら，もう魔法にかかって金しばりにあったみいに，身動きできなくなってしまうんだ＞

どっと西山からカラスの群れが舞い上がった。…＜中略＞…

西山が真っ黒い山になった。

＜今夜もまた，狐火が走るんだろうか＞

「人さらいが来っとォ」

誰かがまた叫んだ。

「わーっ」

みんないっせいに，土手から畦に飛びおりてはしった。

また次のようにも(＊9)。

わが西川と西山は，子どもの頃の遊び場である。

その西山が暮れていく。ぼんやりぐらぐらゆれている。生臭い草の息がする。…＜中略＞…西山がずんずん暮れていく。

「いくぞっ」と声をかけて走ったら，稲の切り株が足裏をつきさした。爪先立ちしながら躍って走った。刈りとった田んぼなのに，土がしめっている。走りながら投げたら，わっとだれかが手をのばした。川向こうにとんだのか，土手下の草むらに消えたのか，ボールを見失ってしまって，あれっ，やっぱりどいつもみんな，つっ立ったままでいた。

「もうはあ，あんけらこんけらだあ」だれかがさけんだ。

どっと西山から烏の群れが舞い上がった。「くわあ」「ああ」「くわあ」「くわあ」「あわ」「あわ」「あわ」

はなれるかと見せて，西山の天辺に舞い下りてまだぐるぐるまわる。烏

の群れにぼんやりと見とれていたら，ゆんべおそく，西山の南の端に狐火が走って行ったのを思い出した。

「あれあ，狐の嫁入りだっぺ」だれかの声がする。遠い漁り火のように，南から北へぱちぱち走って消えていく。「それっ，人買いが来っぞ」もうひとりがさけんだ。

「わっ」みんな畦にとび出して走った。ぞくぞく寒くなってきて，一目散に走った。肩ごしに真っ黒いものが，ばたばたかすめてとんだ。ひえっと首すくめた。こんなことがずっと前に一度あったなと思って，走っていった。

西山に行かない日だって梶山少年はそちらをながめて過ごしたという(＊10)。

（空襲で焼け出されて常陸太田にやってきた父親が，一家のための小さなお家を建てた。その家の―）縁側からのながめは見晴らしがよく，西三町のはずれから田んぼの向こう，西川とはるか西山が望めた。…＜中略＞…台所の勝手口を出た井戸端のところにある胡桃の木は，西の方向にかたむいたまま，しっかりと根づいている太い木だった。…＜中略＞…その胡桃の木のてっぺんにのぼるのが日課となった。…＜中略＞…学校から帰れば，胡桃の木のてっぺんにのぼり，馬乗りになった。…＜中略＞…胡桃の木のてっぺんは，坂下の家々と田を越えて，西川の向こうの西山を望むという，屋根の上でもなく，屋根の下でもない，とにかくゼッタイにぼくの気に入りの，落ち着きの良い場所になった。（括弧内の文言は引用者による補足）

これほどまでに「西山」という土地の名には作者自身の強い思い入れがある――梶山さんにとって「西山」とは，世にあるものの何ひとつ恐れず遊び興じた子供時代の，また同時に，あらゆるものに憑きまとうこの世ならぬ影にいつも畏れおののいた子供時代の，言わば大胆と小心のないまぜになった“生の記憶”そのものなのだ。

とは言いながら，そのようなことをいま目の前にいる聞き手にそれと伝えることは難しい。また同様に「（西山）風土記」の一語も，きっと「常陸国風土記」

を念頭に置いて作者があえて用いた大切な表現(＊11)なのだが，それに込められた思いのひだをいま目の前にいる聞き手に向けてくだくだと説明し始めても仕方なかろう。ここではそのまま“なにとも知れない本”としておくのが良い。

大切なことは――この物語が“個人の記憶”を通して顕現した“共同体の記憶”であればこそ「“どことも知れない場所のなにとも知れない本”に伝えられたお話」として語ることである。

２)「1-2 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 1―2 | | | ＜絵①：1―2 頁を提示する＞ |
| | 03 | ab | ＊＊にしやまに ＊しょんぼり ＊ひが おちた。 |
| | 04 | bc | ＊＊あたりは ＊しょんぼり ＊くれてきた。 |
| | 05 | cd | ＊＊ふああ ＊と なまあったかい かぜ ふけば |
| | | de | ＊そろそろ ＊三つ目が でてくる ころや。 |

ここで［1-2 頁／絵①］を見てみよう。

［1-2 頁／絵①］画面奥，緑青色に塗り込められた山なみがうねっている――西山である。尾根筋に松樹が何本もそびえ立っている。まさしく「灌木の林の上を，赤松がひょいひょい顔を出して，暢気に風に吹かれて何かにつけて町を眺めているといった」ふうである(＊12)。はや空は薄墨色に暮れなずんで，西山の麓あたりはみな――田んぼもあぜ道も橋のたもとも，山からの道と村への一本道とが交わる辻も，すべて薄暗闇に沈んでいこうとしている。ただ川面ばかりが残照を集めて白々と暮れ残って，滔々と流れる川水の音があたり一帯に響き渡っている。

最初の場面である。まず「暗いセピア色の地の上に，ぺらんと一枚紙をおいたような画面」(＊13)に驚く――まるで古い“絵巻物”から切り取って置いた一場面のよう――となれば傍らの「暗いセピア色の地」に書き添えられた文章はちょうど“詞書”だ――その“詞書”を読み上げながら読み聞かせを行えば，それはあたかも“絵解き説法”みたくて(＊14)。

そういう意味では，この絵本を用いて読み聞かせを行う人は，かつて“絵解き説法”の場で見物の善男善女衆を前に絵巻絵図を見せながら，おもしろおかしく“語り”を披露して諸衆を物語世界にいざない信仰に導いた僧侶や神職の，その末裔だとも言えようか――今日この絵本を読み聞かせするならば，そういう構えで行いたい。それにならえば［群読の読み手たち］も「全員で“ひとりの絵解き者”」である――そういう構えを共有し合うことが大切だろう。

上の分読案では冒頭の「にしやまに　しょんぼり　ひが　おちた。／あたりは　しょんぼり　くれてきた。／ふああと　なまあったかい　かぜ　ふけば／そろそろ　三つ目が　でてくる　ころや。」(03-05 文）について，［読み手］が二人ずつ組んで，かつ上手から下手に向けて組み合わせをずらしながら全員で読み合わせていくように仕立てている――「読み手全員でひとりの語り手」という意識をまずは読み手たち自身が確かめ合うためだ。もちろんそのことが聞き手にも視覚的・聴覚的に伝わるならばもっと良い。

◇　　◇

ここで改めてこの冒頭三文（03-05 文）が最初に指し示す“物語の枠組み”を確認しておきたい――それについて丁寧に読み取っておくことは，読み聞かせであれ群読であれ，それを行ううえで不可欠だろうから。

この冒頭三文の語っている事柄が要するに「薄暗闇のなか，風とともに“三つ目”がやってくる」という“伝承”あるいは“共同体の記憶”であるのは自明としても，もう一歩踏み込んで言うならば――

――西山の向こう（“あちら側”）には“異界”があって，そこには“三つ目”（をはじめとして様ざまな“異形者”）が棲んでいる。そして彼等は“薄暗闇”のなか“風”に乗って西山の麓にある私たちの村（“こちら側”）にやってくる。“薄暗闇”と“風”こそは，まさに“異界”と“此世”とを通い合わせる“霊的な力”の顕現なのだ――と，物語の語り手（あえて“作者”とは言うまい）は“共同体の一員”として感じとっているのだ。

冒頭三文はそういう語り手の心性を暗に指し示している――この物語は“山”“川”“橋”“辻”といった“説話的神話的な場”を舞台に，“風”“光／闇”“声”“音”といった“民俗的宗教的現象”によって紡がれる，強いて言う

なら“生きることのおもしろかなしさ”をめぐるカタルシスなのだ。

だから，この作品を“言葉遊びの絵本”だと思い込んではいけない。確かに，くり返される“声”や“音”を語りの基調に据える点などではまさしく“きりなし噺”のしつらえを現すが，本質はその枠内に留まらない。

となれば，「しょんぼり　ひが　おちた。／あたりは　しょんぼり　くれてきた。」のくり返される「しょんぼり」や，「ふああと　なまあったかい　かぜふけば」の「ふああ」などはよほど大切に読まなければなるまい――それらオノマトペの表現は，前後の間，速度，声の高低・大小・強弱・明暗などといった“チェンジ・オブ・ペース”の工夫次第でいかようにも雰囲気を変えうるだろう。その部分を読み担う［読み手たち］が様ざまに試行錯誤して，それぞれに創意工夫を凝らしてくれるよう期待したい。

3）「3-4 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 3－4 | | | ＜絵②：3－4 頁を提示する＞ |
| | 06 | de | **ふああ *となまあったかい かぜ ふいてきた。 |
| | 07 | a－e | ＜間髪いれず＞それ みなせ |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞にしやまの ふもとから *三つ目が やってきた。 |
| | 08 | b | **あしを *べったら |
| | | c | *べったら |
| | | d | （*べったら）*させて |
| | | b | **三つめだま *ぎんぎら ＜それぞれ思い思いに会場を |
| | | c | （*ぎんぎら） にらみ回しながら＞ |
| | | d | （*ぎんぎら）*させて |
| | | bcd | *やってきた。 |
| | 09 | c | **きょうは にんげんを くってやっか。 |
| | 10 | bcd | **三つめだま ぎんぎらさせて |
| | | a－e | *でん *と ふんばったとよ。 |

ここで［3-4 頁／絵②］を見てみよう。

［3-4 頁／絵②］前頁の絵①と同じく，暮れなずむ西山の麓あたりの景色である。ただ①よりも俯瞰の位置（描き手の視点）を下げた画面構成に

なっている――画面手前を村への一本道が横切り，山からの道と交わる辻も読者の眼前に迫る。その辻へ山から“三つ目”がのっしのっしとやってきた。総身朱色の身体に同じ色の腰切りの筒袖衣。緑の短帯と同じ色の重ね衿がよく映えて，かえって悪目立ちしているほど。それに加えて手指こわばらせ，肩いからせて，緑の蓬髪を風になびかせて，目玉をひんむき，乱ぐい歯をのぞかせているからには，これはもう“化け物”以外の何者でもない。大きな素足で地面を踏みしめる音がずしんずしんと響き渡って，川水の音さえかき消されそうだ。

その巨大で凶暴そうな“化け物”の出現を存分に表現したい。上の分読案では，まず［読み手ａｅ］が「ふああと　なまあったかい　かぜ　ふいてきた。」(06 文）と“予感”をナレーションするのに続いて＜間髪いれず＞，［読み手全員］が強く，すばやく，大きな声で「それ　みなせ」と危険を周囲の村々に告げる躰で読み合わせ，さらに＜間髪いれず＞，主に“三つ目”を読み担う［読み手ｂｃｄ］が「にしやまの　ふもとから　三つ目が　やってきた。」(07 文）とみずから出現を宣言する躰で読み合わせるように仕立てている。この「それ…」以降の一文は大胆に読み上げよう――聞き手たちが驚いてビクッと身じろぎするぐらいでちょうど良い。この一文こそは，聞き手を物語世界にいざなうためにかける“魔法”なのだから。

ここで聞き手に“魔法”をかけてしまうことが大事だ――それができてこそ，後続の「あしを　べったら　べったら　（べったら）　させて／三つめだま　ぎんぎら　（ぎんぎら　ぎんぎら）させて　やってきた。」(08 文）や「三つめだま　ぎんぎらさせて　でんと　ふんばったとよ。」(10 文）といった“ありそうもない様子”や，「きょうは　にんげんを　くってやっか。」(09 文）といった“とんでもない言葉”を，あたかも現実みたく思い浮かべることもできるのだ。それを読み上げるのに合わせて，“三つ目”を読み担う［読み手ｂｃｄ］が＜それぞれ思い思いに会場をにらみ回しながら＞などの所作を演じるのも，その“魔法”の効果を高める方途である。

4）「5-6 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 5−6 | | | ＜絵③：5−6 頁を提示する＞ |
| | 11 | a | **むこうから *あぶら 一しょう ぶらさげて |
| | | e | *ぺたら ┐ ＜高い声＞ |
| | | a | （*ぺたら） ┘ ＜低い声＞ |
| | | e | *ぺたら ┐ ＜高い声＞ |
| | | a | （*ぺたら） ┘ ＜低い声＞ |
| | | ae | **むすめが ひとり やってきた。＜三つ目に気付かない様子＞ |
| | 12 | c | **＜特に大きな声で＞はら へった |
| | | b | *はら へった。 |
| | | d | *こおら *おまえを くってやる。 |
| | 13 | bcd | **三つ目は くびを *しゅるう *と つんだしたとよ。 |
| | | | ＜ e はここで初めて三つ目に気付いたというような所作をする＞ |

ここで［5-6 頁／絵③］を見てみよう。

［5-6 頁／絵③］画面左方から大きな油徳利を抱えた“むすめ”がやって来た。おつかいの帰りなのだろう，荷物の重さをこらえて足許に目を配りつつ，村への一本道を一歩ずつ進んでいく。ふと顔を上げた彼女は，この先の辻あたりに立ちふさがる“三つ目”の姿を見つけた。両目も口もぽっかりまん丸く開いて，たいそう驚いた様子だ。“三つ目”もまた“むすめ”の姿を見つけたらしい。首をそちらへしゅるうと伸ばしながら，三つ目玉をぎょろぎょろぎょろりとさせている。

上の分読案では［読み手 a］と［ e ］が「むこうから　あぶら　一しょう　ぶらさげて／ぺたら　（ぺたら）　ぺたら　（ぺたら）／むすめが　ひとりやってきた。」（11 文）と交互に読み合わせるように仕立てている。

この箇所，“むすめ”は油徳利の重さをこらえつつ，足許に注意を向けて一歩ずつ進むのに精一杯なのだ。だからこの先に立ちふさがっている“三つ目”にはまだ気付かないでいる。くり返す「ぺたら　ぺたら」はそういう“むすめ”の様子をとてもよく表している一語だ。だからこそ，それを読み担う［読み手

たち］がチェンジ・オブ・ペースを様ざまに試行錯誤して，それぞれに創意工夫を凝らしてくれるよう期待したい。

◇　　◇

“むすめ”に向かって“三つ目”は，改めて自分を誇示するように脅かしにかかる。上の分読案ではまず［読み手ｃ］が＜特に大きな声で＞「はら　へった」と読み始め，次いで［ｂ］が「はら　へった。」と繰り返し，最後に［ｄ］が「こおら　おまえを　くってやる。」と読み納める（12 文）――“三つ目”を読み担う［ｂｃｄ］（そのなかでｃが“真ん中の目”という躰だ）がそれぞれに脅かしながら，最後に三人で「三つ目は　くびを　しゅるうと　つんだしたとよ。」（13 文）と読み合わせるように仕立てている。

それを承けて，“むすめ”を読み担う［読み手ｅ］が＜ここで初めて三つ目に気付いたというようなふりをする＞などの所作を演じるのも，すべて“むすめ”の驚きと恐れを表現するためだ。

5）「7-8 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 7―8 | | | ＜絵④：7―8 頁を提示する＞ |
| | 14 | ae | **むすめは　びっくりするやら　あわてるやら。 |
| | 15 | e | **こくん　*と　一つ　*つば　のんで　**かのなくような　こえで<br>いったとよ。 |
| | 16 | e | **＜間を長めに＞くわれてもいいんけんど　*これ　のませっから<br>**＜間を長めに＞そのくび　*もっと　のばしてみせてくれや。 |
| | 17 | c | **＜自信たっぷりな様子で＞そんなら　みせてやっか。 |
| | 18 | b | *＜早口で＞いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらば　ごじゃれ　って |
| | | d | *はやくちで　となえてみろ |
| | 19 | bcd | **このくびは　なんぼでも　のびていくわい。 |

ここで［7-8 頁／絵④］を見てみよう。

［7-8 頁／絵④］画面右から“三つ目”が首をぬっと突き出している。“むすめ”は突然のことにびっくり仰天，やおらひざまずいては両手をすり合

わせ「この徳利の中身をすっかりあげるので，どうか命ばかりは…」と懇願しているように見える。そのあわてっぷりを見て満足したのか，あるいは「しめしめ今宵の酒と食事にありついた」と思い込んだか，“三つ目”はなにやら満足らしくにらにら笑っている様子だ。

絵④から「命ばかりは…」と懇願している姿かと見たが，“詞書”に描かれる“むすめ”は，どうしてどうしてなかなかのタマだ。

最初「むすめは　びっくりするやら　あわてるやら。」(14 文)，続いて「こくんと　一つ　つば　のんで／かの　なくような　こえで　いったとよ。」(15 文）と，か弱く心細そうな様子かと思えば――わずかの間に何を考えたか，意外や「くわれてもいいんけんど」ときもの据わったことを言い始める――さらに「これ　のませっから」と徳利の中身があたかも酒であるかのようにたばかって――ついには「そのくび　もっと　のばしてみせてくれや。」と計略さえめぐらしてしまうのだ（16 文)。

こういう“むすめ”の変容は，この物語の展開にとって実に大切な場面である――上の分読案は［読み手ｅ］の頑張りに期待するよう仕立てている――前後の間，速度，声の高低・大小・強弱・明暗などのチェンジ・オブ・ペースを様ざまに試行錯誤して，創意工夫を凝らしてくれるよう期待したい。ここで“むすめ”の変容の面白さを聞き手たちがたっぷりと味わえてこそ，後続の“三つ目”の台詞がいっそう面白くなるからだ。

その後“三つ目”は“むすめ”の計略にまんまと乗せられて大切な秘密をみずからばらしてしまうのだ――「そんなら　みせてやっか。／いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらば　ごじゃれって／はやくちで　となえてみろ／このくびは なんぼでも のびていくわい。」(17-19 文）と威張って言うが，実はすでに二人の力関係は逆転してしまっている。“三つ目”は自分のことをいまだに「強い」と思っているが，そう思っているのは自分だけ。聞き手たちは彼の愚かさをみんな知っていてくすくす笑っているのだ――こういうところが“化け物噺”の面白さのひとつだろう。だから［読み手ｂｃｄ］には，この場面を＜自信たっぷりな様子で＞読み合わせていくようにチェンジ・オブ・ペースを様ざまに試

行錯誤して，創意工夫を凝らしてくれるよう期待したい。

6）「9-10 頁」と「11-12 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 9－10 | | | ＜絵⑤：9－10 頁を提示する＞ |
| | 20 | abc | **＜一息に＞あぶらか　さけか |
| | | cde | ＜間髪いれず一息に＞さけか　あぶらか |
| | | a－e | **三つ目は　はら　へって　*とんと　わからん。 |
| | 21 | bcd | ＜間髪いれず一息に＞つるつるつる（っ）と　のみほしたとよ。 |
| | 22 | ae | **そこで　むすめは　となえたとよ。 |
| | 23 | e | **＜ためらいがちに＞いぐいぐいぐいぐ　*ごじゃらば　ごじゃれ |
| | 24 | bcd | *すると　三つ目の　くびが　*＜区切りつつ＞しゅる・しゅる。 |
| | 25 | e | **そこで　むすめは |
| | | | ＜間髪いれず一息に＞いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらば　ごじゃれ |
| | 26 | bcd | ＜間髪いれず＞すると　三つ目の　くびが |
| | | | *＜区切りつつ＞しゅる・しゅる・しゅる。 |
| 11－12 | | | ＜絵⑥：11－12 頁を提示する＞ |
| | 27 | ae | **そこで　むすめは |
| | | | ＜間髪いれずリズミカルに＞いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらば |
| | | | ごじゃれ |
| | 28 | bcd | ＜間髪いれず＞すると　三つ目の　くびが　＜一息に＞しゅるしゅる |
| | | | しゅるしゅる。 |
| | 29 | bcd | **三つ目は　三つめだま |
| | | c | *ぎんぎら　　＜声を徐々に高くして＞ |
| | | bc | ＜間髪いれず＞（ぎんぎら）　　＜それぞれ思い思いに会場を |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞（ぎんぎら）　　にらみ回しながら＞ |
| | | a－e | ＜間髪いれず＞（ぎんぎら） |
| | | c | **させたとよ。 |
| | 30 | bcd | ＜間髪いれず＞いつまで　となえとるだあ。 |

ここで［9-10 頁／絵⑤］と［11-12 頁／絵⑥］を見てみよう。

［9-10 頁／絵⑤］“三つ目”は右手に油徳利を握りしめたまま，首を自分の身の丈よりも長くながく伸ばした。その足許にひざまずいた“むすめ”

は両手をすり合わせて拝みながらも，しゅるしゅる伸びる首の様子をあっけにとられて眺めるばかり。

［11-12 頁／絵⑥］“三つ目”の首はどんどん伸びる――道に沿って，川に沿って，山なみに沿って。すきを見てとうとう“むすめ”は逃げ出した。その後ろ姿を三つ目玉ぎょろりとさせて追うが，首を伸ばしすぎた“三つ目”は動きもままならぬらしい。口を大きく開いてはなにごとか叫んでいるようだ。

このあたりまで読み進んでくると，いよいよ言葉のリズムや音の響きが目立って面白くなってくる。

たとえば「あぶらか　さけか／さけか　あぶらか／三つ目は　はら　へってとんと　わからん。／つるつるつる（っ）と　のみほしたとよ。」(20-21 文）の，キリッとめりはりの利いたリズムの小気味よさ。

また例の呪文「いぐいぐいぐいぐ　ごじゃらばごじゃれ」はだんだん調子に乗って（23 文から 25 文へ）スピード感を増していくし，それに対応してオノマトペ「しゅるしゅるしゅる」や「ぎんぎら」もよく響きあって存在感を増していく。

上の分読案では［読み手ｂｃｄ］と［ａｅ］が掛け合いながら読み合わせていくように仕立てているが，それぞれの［読み手］がチェンジ・オブ・ペースを様ざまに試行錯誤し，それぞれの創意工夫を競い合わせ重ね合わせることで，さらに変幻自在の読みを創り出すことができるはずだ。

7）「13-14 頁」と「15-16 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 13 | | | ＜絵⑦：13－14 頁を提示する＞ |
| －14 | 31 | a | **それ きいて *むかいの たんぼの おすがえるが |
| | | | なきだしたとよ。 |
| | 32 | a | **いぐいぐいぐいぐ *いぐいぐいぐいぐ。 |
| | 33 | a | ＜会場上手側にいる子供たちに一緒に唱えるよう促す＞ |
| | | | （*さあ こちらがわに いる みんなも おすがえるに なって |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | いっしょに いぐいぐ いってみて。せーの） |
| | 34 | 子供 | （**いぐいぐいぐいぐ *いぐいぐいぐいぐ。） |
| | 35 | a | （*さあ もう一度。もっと大きな声で。さん ハイ。） |
| | 36 | 子供 | （**いぐいぐいぐいぐ *いぐいぐいぐいぐ。） |
| | 37 | e | **それ きいて *そのまた むかいの たんぽの めすがえるが なきだしたとよ。 |
| | 38 | e | **ごじゃらばごじゃれ *ごじゃらばごじゃれ。 |
| | 39 | e | ＜下手側にいる子供たちに一緒に唱えるよう促す＞ （*さあ こちらがわの みんなが めすがえるに なって ごじゃらばごじゃれって いってみて。せーの） |
| | 40 | 子供 | （**ごじゃらばごじゃれ *ごじゃらばごじゃれ。） |
| | 41 | e | （*さあ もう一度。もっと大きな声で。さん ハイ。） |
| | 42 | 子供 | （**ごじゃらばごじゃれ *ごじゃらばごじゃれ。） |
| 15 | | | ＜絵⑧：15－16 頁を提示する＞ |
| －16 | 43 | bcd | **すると 三つ目の くびが ＜それぞれ大仰な身振りで会場をにらみ回しながら＞ |
| | 44 | c | ＜間髪いれず一息に＞しゅるしゅるしゅるしゅるう。 |
| | 45 | bd | ＜間髪いれず一息に＞しゅるしゅるしゅるしゅるう。 |
| | 46 | bcd | ＜間髪いれず一息に＞（しゅるしゅるしゅるしゅるう。） |
| | 47 | c | **もう **はあ |
| | | a－e | **かえるまで となえたから *なんぽでも のびていくとよ。 |

ここで［13-14 頁／絵⑦］と［15-16 頁／絵⑧］を見てみよう。

［13-14 頁／絵⑦］場面は変わって田んぼの真ん中。あぜが前後左右に走っている。あたり一帯におびただしい数の蛙たち。みんな揃って画面左方を向いてちんとつくばっている。彼等の上方に“三つ目”が鎌首もたげている。三つ目玉ぎょろりと向いて口を歪めてなんだか苦しそう。

［15-16 頁／絵⑧］ここもまた田んぼの真ん中。あたり一帯にまたおびただしい数の蛙たち。こちらは揃って左方を向くが，やはりちんとつくばっている。ますます長くなった“三つ目”の鎌首はとうとう画面からはみ出しそうだ。なんとか踏みとどまろうと口をへの字に結んでりきみ返っているらしい。

この場面からが小稿に言う「子供参加型」の始まりである。

まずは“おすがえる”を読み担う［読み手ａ］が「それ　きいて／むかいのたんぼの　おすがえるが　なきだしたとよ。」(31 文）と読み始め，「いぐいぐいぐいぐ　いぐいぐいぐいぐ。」(32 文）と鳴き始めよう。そのうえで＜会場上手側にいる子供たちに一緒に唱えるよう促す＞形で，たとえば「さあ　こちらがわに　いる　みんなも　おすがえるに　なって　いっしょに いぐいぐ いってみて。　せーの」などとリードするのだ。ここまで“お客さん”でしかなかった聞き手（子供たち）の何人かでも，小さな声ででも「いぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐいぐ。」と言ってくれればしめたもの。（この際，［読み手ｂ～ｅ］も子供たちを励ますように，大げさな身振りで一緒に「いぐいぐ」と唱えても良いかしれない。）

ここで再び［ａ］は「さあ　もう一度。もっと大きな声で。さん ハイ。」）などと改めて子供たちの参加を促そう――ようやく子供たちから「いぐいぐいぐいぐ　いぐいぐいぐいぐ。」の鳴き声が聞こえてきそうだ。

［読み手ｅ］による“めすがえる”の鳴き声「ごじゃらば　ごじゃれ」の方もすべて同様だ。

こうして子供たちが参加してくれるのを承けては［読み手ｂｃｄ］も大いに頑張りたい――＜それぞれ大仰な身振りで会場内を睨み回しながら＞＜間髪いれず一息に＞「しゅるしゅるしゅるしゅるう　しゅるしゅるしゅるしゅるう しゅるしゅるしゅるしゅるう。」とやって子供たちの参加に報いたい。（子供たちの笑い声が聞こえてくる気がするのは論者だけだろうか。）

以下，［17-18 頁／絵⑨］［19-20 頁／絵⑩］［21-22 頁／絵⑪］にかけては同様に，会場にいる聞き手（子供たち）と［読み手たち］との“コール＆レスポンス”という形で読み合わせていくことになる。ここが小稿に言う「子供参加型の群読」のきもである。

8）「23-24 頁」と「25-26 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 23<br>－24 | 78 | ae<br><br>bcd | ＜絵⑫：23－24 頁を提示する＞<br>＊＊あんまり むすめの かえりが おそいもんで<br>＊ばあさまが とぐちに でたら<br>＊あたまの うえを あかい もんが ＊しゅるしゅるしゅるって<br>のびていくとよ。 |
| 25<br>－26 | 79<br>80 | a<br>a | ＜絵⑬：25－26 頁を提示する＞<br>＊＊こんな なげえ ばけものふんどし みたことね。<br>＊ばあさまは かまを もちだして<br>＊チョッキリ ＊＊と きったとよ。 |

ここで［23-24 頁／絵⑫］と［25-26 頁／絵⑬］を見てみよう。

［23-24 頁／絵⑫］場面は変わって“ばあさま”のお家あたり。川はもう見えないから，先ほどのところからはずいぶん離れた場所らしい。たっぷりのワラ草でふいた立派な屋根が美しい。門先に立つ“ばあさま”は両手をかざして空を見あげている――目も口もまん丸にしてなにやら叫んでいるようだ。見つめる先には例の“三つ目”の長くながく伸びた首。ずいぶん遠くまで伸びにのびてやって来た。もちろん“ばあさま”はそれと知るよしもない――なんじゃらホイと驚くばかり。

［25-26 頁／絵⑬］場面は変わらず“ばあさま”のお家の門先。鎌を手にした“ばあさま”は，身も軽くひょいと飛び上がったかと思うと鎌を振りかざし，“三つ目”の伸びにのびた首をチョキンと切った。もちろん“ばあさま”はなんにも知らない。

いかにも“笑話”らしく，読み手（聞き手）の意表をつく“下ゲ”に向かって物語は進んでいく――“三つ目”の首がずいぶん遠くまで伸びにのびたので，なんにも知らない“ばあさま”がそれを見て，鎌でチョッキリと切ったというのだ。なんともけんのんな結末だが，そこは“昔噺風”の物語のこと，くすっと笑みのもれることこそあれ，眉をひそめるような“残酷”の印象はわずかば

かりも生じない――それが「こんな　なげえ　ばけものふんどし　みたことね。」(79 文) という“ばあさま”のアッケラカンとした“見立て”のおかしみに発することは言うまでもない。

この一文と後続の「ばあさまは　かまを　もちだして／チョッキリと　きったとよ。」(80 文) の一文と，それらを“ばあさま”として読み担う［読み手 a］はチェンジ・オブ・ペースの創意工夫によって，アッケラカンとした笑いを創り出したいところだ。

9)「27-28 頁」と「29-30 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 27 | | | ＜絵⑭：27－28 頁を提示する＞ |
| －28 | 81 | c | **なんじゃ かるくなったみてだな。 |
| | 82 | bcd | *うしろ ふりかえって 三つ目は あわてたのなんのって。 |
| | 83 | ae | ***かぜが ぽふあ *と ふいてきた。 |
| | 84 | bcd | **三つ目の くびは |
| | | a | *あっちへ　＜ひと続きに聞こえるようなめらかに＞ |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞しゅるしゅるう |
| | | e | *こっちへ　＜ひと続きに聞こえるようなめらかに＞ |
| | | bcd | ＜間髪いれず＞しゅるしゅるう |
| | | ae | *とんでいくとよ。 |
| | 85 | c | **いったい どこまで とんでいくんやら |
| | | a－e | *その さきは *とんと *だ（あ）れも しら*ま*（ん）かったとよ。 |
| 29 | | | ＜絵⑮：29－30 頁を提示する＞ |
| －30 | | | |

ここで［27-28 頁／絵⑭］と［29-30 頁／絵⑮］を見てみよう。

［27-28 頁／絵⑭］“三つ目”の伸びにのびた首がクルクルふわふわと宙を舞う――“ばあさま”にチョッキリと切られてしまって，風に吹かれて漂っているのだ。とは言っても，三つ目玉を見開いて大口も開けて，“三つ目”はあいかわらず意気軒昂だ。

そのはるか下に再び西山の麓あたりが見える――緑青色に塗り込められ

た山なみ，それに平行して流れる川，田んぼもあぜ道も，山からの道と村への一本道も見える――が，それらはこれまでになく遠く小さい。どうやら“三つ目”の首はずいぶん高い空を漂っているらしい。

［29-30 頁／絵⑮］場面は変わらず西山の麓あたりだ。ふと見あげれば，風に吹かれて漂いながら“三つ目”の伸びにのびた首が，いましも西山の向こうに飛び去っていこうとしている――ずいぶん遠く小さくなって。

アッケラカンとした“ばあさま”によって首をチョッキリと切られてしまった“三つ目”だが，こちらも“昔噺風”に実にアッケラカンとしたもので――「なんじゃ　かるくなったみてだな。」(81 文）とまるでひとごと。この“アッケラカンの交換”があってこそ，後続の「うしろ　ふりかえって／三つ目は　あわてたのなんのって。」(82 文）という“三つ目”のあわてっぷりが際だって，いかにも“笑話”らしいおかしみが醸し出されてくるのだ。

そうこうしているうちに「三つ目の　くびは／あっちへ　しゅるしゅるう／こっちへ　しゅるしゅるう」(84 文）と風に吹かれて飛んでいく。それを眺めながら，しまいにとうとう語り手までがアッケラカンとこう言い放つ――「いったい　どこまで　とんでいくんやら／その　さきは　とんと　だ（あ）れも　しら㐌（ん）かったとよ。」(85 文）――“むすめ”はもちろん“ばあさま”も“三つ目”も，そして語り手までもだあれも結末を知らない，これぞ“きりなし噺”だ――“下ゲ”が決まって読者も“落チ”る。

こういうアッケラカンとした“昔噺風”の語り口，その味わいを大切にしながら読み納めたいところだ。特に［読み手全員］で読み合わせる「その　さきは　とんと　だ（あ）れも　しら㐌（ん）かったとよ。」については，特にチェンジ・オブ・ペースを様ざまに試行錯誤して，創意工夫を凝らしてくれるよう期待したい。

◇　　◇

さて物語の終末になって，冒頭に吹いた“風”が再び吹き返してくる――「かぜが　ぼふあと　ふいてきた。」(83 文）がそれである――冒頭では

「ふああと　なまあったかい　かぜ　ふいてきた。／それみなせ　にしやまのふもとから　三つ目が　やってきた。」とあった。物語冒頭で“風”に乗って現れた“三つ目”は，しまいには“首”ばかりの“ばけものふんどし”となり果てて，「あっちへ　しゅるしゅるう／こっちへ　しゅるしゅるう」と漂っては西山の向こう（“あちら側”）に帰っていくのだ。

“風”こそはまさに「西山の向こう」という“異界”と“この世”とを通い合わせる“霊的な力”の顕現だったのだ。それに乗って“異形者”は“此界”を訪れ，また“異界”へと去っていく――この物語世界のなかで“風”は不思議な“民俗的宗教的現象”として大切な役割が与えられている。そしてそれは“個人の記憶”をはるかに超える，たぶん“共同体の記憶”とでも言うべきものから発しているに違いない。

そういう大切な役割が与えられているのは“風”ばかりではない――この物語は“山”“川”“橋”“辻”といった“説話的神話的な場”を舞台に，“風”“光／闇”“声”“音”といった“民俗的宗教的現象”によって紡がれる，強いて言うなら“生きることのおもしろかなしさ”をめぐるカタルシスである。

むろん――そのような“読み解き”など，「およそ群読や読み聞かせの実践じたいには関わりもしない」とご異見のひとつも頂戴するかしれないが，もしや［読み手たち］一人ひとりがそういうことをまったく知らないままでいるとするなら，あるいはそういうことにまったく鈍感なままでいるとするなら，やはりその人たちが行う群読や読み聞かせは“真の力強さ”を備えない――少なくとも論者にはそう思われてしかたない。特にいつか学校園に勤めて乳幼児・児童の言葉を育む役割を担う（に違いない）学生たちには，そういうことにも鋭敏に反応する感受性を備えていてほしいと心から願う。

10)「31 頁」の分読

| 頁 | 文 | 分担 | 本文 |
|---|---|---|---|
| 31 | | | ＜絵⑯：31 頁を提示する＞ |
| | 86 | ab | ＊＊なんでも 三つ目は ＊くびばっかり ぶらさげて |
| | | bc | ＊しゅるしゅる ＊（しゅるしゅる）とんでいるんで |
| | | cd | ＊もうはあ ＊あんけらこんけら |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | | ＊めんどくさくて ＊たまんねえって |
| | | de | ＊つちのなかに もぐってしまったとよ。 |
| | 87 | ace | ＊そしたら めも みえなくなってきて |
| | | bd | ＊とうとう みみずになって しまったとよ。 |
| | 88 | ace | ＊ほんとか うそか |
| | | | ＊それは だ（あ）れも しらな（ん）かったとよ。 |
| | 89 | c | ＊そうや ＊みみずに きいてみたら ＊どうやろか。 |
| | 90 | a－e | （＊＊これで おしまい。） |

最後に［31 頁／絵⑯］を見てみよう。

［31 頁／絵⑯］場面はやはり西山の麓あたりの景色らしい。カラスの二羽，三羽がのんびり飛び交わしているからか，ずいぶん印象は違ってのどかな趣きである。

山なみを背景に「後日談」が手書きされている――“三つ目”は首をぶら下げて飛んでいるのがほとほと面倒くさくなって地面にもぐり，とうとうミミズになってしまった，ほんとかうそかだれもしらない，ミミズに聞いてみたらどうだろか――などと言う。

この「後日談」の要不要については実は議論もあるかしれない。すでに前頁までに噺の“下ゲ”は決まって“落チ”はついている。読者によっては（なくもがな）と感じる人もあるだろう――いっそ「いったい　どこまで　とんでいくんやら／その　さきは　とんと　だ（あ）れも　しらな（ん）かったとよ。」（85 文）で語り納めた方が良かった，と。

子供たちを相手に読み聞かせをしてみると分かるのだが，しまいにこう尋ねてくる子供がいるものだ――「ねえ，それで三つ目はどうなったの，どこにいったの」――まだ“落チ”つかないのだ。梶山さんが用意した「後日談」は，そういう子供たちへの“アフター・サービス”である。

であればこそ論者はやはり大切に読んでおきたいと思う。上の分読案は冒頭 03-05 文と同様に，［読み手］が二，三人ずつ組んで，かつ上手から下手に向けて組み合わせをずらしたりしながら全員で読み納めていくように仕立てい

る。［読み手たち］がそれぞれの主な読み担い方を離れて，再び「読み手全員でひとりの語り手」という最初の立ち位置に戻るというわけ。

――全体とかく行き届かないことも多いが，ひとまずこれでおしまい。

［註］

＊1）ここに言う「群読作りの基本」とは，下記のご論考などに示された高橋俊三さんのお考えに遵うものである。（後段に言う「チェンジ・オブ・ペース」の一語についても同様。）

・高橋俊三（1990）『群読の授業―子どもたちと教室を活性化させる授業への挑戦』（明治図書出版）

・高橋俊三（2008）『声を届ける　音読・朗読・群読の授業』（三省堂）

＊2）古田雅憲（2018）「絵本『めっきらもっきら　どおんどん』を読む―ビジュアル・シンキングを併用する群読の構想―」（西南学院大学人間科学論集第14巻第1号57-85p.）

＊3）梶山俊夫さんの略歴について，湯原公浩編（2006）『別冊太陽 絵本の作家たちⅣ』（平凡社）は次のように言う（43p.）。

> かじやまとしお
>
> 1935年東京生まれ。日大芸術学部卒業。『かぜのおまつり』と『みんなであそぶわらべうた』でプラチスラバ世界絵本原画ビエンナーレ金のリンゴ賞，『いちにちにへんとおるバス』で講談社出版文化賞，『あほろくの川だいこ』で小学館絵画賞，『こんこんさまにさしあげそうろう』で絵本にっぽん大賞を受賞。現在，千葉県在住。

※上掲書の公刊後，2015年6月16日に79歳で逝去された。

※また別に，福音館書店「母の友」編集部（2006）「絵本作家のアトリエ（2）梶山俊夫さん」（「母の友」636号）では次のように言う（10-18p.）。

> 梶山俊夫さんは一九三五年，東京・亀戸，大工の棟梁の家に生まれた。ちゃきちゃきの江戸っ子だったが，戦争の激化にともない，小学校三年生のとき茨城県久慈郡（現常陸太田市）に疎開。四年間の疎開生活で「常陸太田の人間以上の田舎っぺになった」という。
>
> 終戦後亀戸に戻ったが，疎開時代の体験は，今でも絵を描いたり表現をするときのリズムと深く関わっている。
>
> 「完全に田舎の子どもになったから，今もぼくの体の深いところまで，田舎暮らしの体験が入りこんでいるんだよね」。

＊4）湯原公浩編（2006）『別冊太陽 絵本の作家たちⅣ』（平凡社）50-51p.

なお同書43.pには，疎開先・常陸太田で遊んだ“蛙釣り”の思い出が詳しく語られている。

だんだん戦争が激しくなって，三年生になるとき（引用者注；1943 年，梶山 9 才）に，茨城の常陸太田へ疎開した。そこで僕はものすごいカルチャーショックを受けたんです。亀戸というのは下町の下町で。ぱあっと開けた空なんか見たことないわけ。つまり田舎っていうところに来たのが初めてで，広い田んぼの風景，空の高さとひろがりっていうのを，ものすごく新鮮な思いで見てたわけね。六月，田植えがすむと蛙が出てくるでしょ。小さい子の遊びなんだけど，ケエロッパってオオバコの葉っぱを糸に結んで，田んぼにちょんちょんとやると，蛙が飛びつくわけ。
…< 中略 >…
あっちからこっちから，蛙がぴょんぴょん来るわけですよ。なんてかわいい顔してるんだろうと思ってね。その動きを見てるだけでドキドキしちゃって。水を含んだ綿の玉をくわえた瞬間に僕が竿を上げると，上げた勢いで口から離れて，蛙は一直線に空に向かっちゃうんだよね。手足を伸ばした白い生きものが青い青い空に向かって，弧を描いて。
――……目に浮かびます。
遠く落ちる瞬間までずっと見送ってて，天を仰いでその時思わず，ああ，ボクのビーニジュウクだーって叫んだわけ。B29 っていうのは銀色のアメリカの大きな飛行機で，水戸の町を偵察に来るのね。あんなに立派なんだと思ってみてたんだけど。それに対して僕の蛙はね，真っ白で，青い空をスーッと飛んでいくわけです。ボクのビーニジュウクだーって叫び続けて，毎日のようにやってて，それはいまだに強烈に残ってます。単なる記憶じゃなくて，自然と，それから生きものたちと交流した，一番の出会いですよ。

※この話は梶山さん自身の次の著述にも詳しく綴られている。
・梶山俊夫（1995）『ぼくの空，蛙の空』（福音館書店）72-81p.（「9 ビーニジュウク」章）

*５）長谷川摂子（1988）『子どもたちと絵本』（福音館書店）97p.「とほうもない生きものたち」章

*６）前掲書*5，97-98p.「とほうもない生きものたち」章

*７）梶山俊夫（1998）『ききみみをたてて出かけてみよう』（毎日新聞社）42p.「7 西山」章

*８）梶山俊夫（1995）『ぼくの空，蛙の空』（福音館書店）262-264p.「35 西川」章から私に抜粋した。

*９）前掲書*7，45-46p.「8 あんけらこんけら」章

*10）前掲書*8，156-164p.「20 胡桃の木」章から私に抜粋した。

*11）立岡裕士（2016）「問題としての近代風土記　風土記愛研究のために」（鳴門教育大学研究紀要鳴門教育大学編 31，233-247p.（鳴門教育大学）

*12）前掲書*7，42p.「7 西山」章

*13）長谷川摂子（1988）『子どもたちと絵本』（福音館書店）97p.

*14）事ほど左様に，この作品は“絵解き”の場面を強く思い起こさせる風情をたたえている。やはり梶山さんと古絵巻の深い関わりを思い起こさなければならない。
梶山さんと古絵巻の関わり合いは，「鳥獣人物戯画」を翻案した絵本『かえるのご

ほうび』に“レイアウト担当”として参加したことに始まる。その前後，実際に「鳥獣戯画」を実見して覚えた深い感銘と，それが契機となって自ら絵本作りを始めて経緯について次のように語っている。

絵巻の実物を見せてもらえるというんで，国立博物館に行った。それがね，ヨーロッパで中世のいろんな絵を見たけど，こういう感動の感触はないなと思った。今から千年ぐらい昔のものなのに，つい最近できあがったという感じの，新鮮な呼吸が絵の中にあるんだよ。じーっと見てるとね，それを描いたといわれる鳥羽僧正という人が，絵巻をはさんでそこらへんに座ってるような気がしてきて。彼がね，絵を通して僕に言ってくれるわけですよ。これ，おまえさんが描いたんじゃないのって。同時にね，今度はおまえさんが描く番だよと，こう言ってるんだよ。

――絵描き同士の，時空を越えた心の交流が。

そのくらい強い感動をしたんです。ヨーロッパの絵はね，ものすごくいいなあと思っても，つねに一定の距離感があるわけ。ところがね，鳥獣戯画の場合はそういう距離感が見てるうちになくなっちゃったのね。絵の中へすーっと入りこんでいけるわけですよ。…< 中略 >…この出会いはものすごく新鮮な体験でね。それから十年後には奈良博物館で，もうひとつ信貴山縁起絵巻に出会うんです。そういて見てる時に，松居さんが僕の背中ごしに，梶山さん絵本やってみませんかと言うんですよ。

※湯原公浩編（2006）『別冊太陽 絵本の作家たちⅣ』（平凡社）45-47p.

※福音館書店「母の友」編集部（2006）「絵本作家のアトリエ（2）梶山俊夫さん」（「母の友」636 号）には，その後，絵本『くじらのだいすけ』で初めて絵を描くようになったことが記されている（103-104p.）。

西南学院大学人間科学部児童教育学科